



忘れられないおもひで@オリンピック

神戸大学 経済経営研究所
特命講師 田中克幸

昨年、延期されていた東京オリンピックが1年越しで開催された。商業・政治的過ぎるオリンピックのあり方や、今の社会状況下での開催の賛否や、アスリートの参加資格の不平等性などさまざまな問題があり、若干オリンピックに対する社会の熱量は下がらざるを得なかったものの、やはりオリンピックは面白い。特に同じタイムゾーンで開催されていると、ライブによる臨場感で競技へ没入感が増し、より白熱する。

個人的には今回が2度目の開催国経験で、1度目は2000年のオリンピック開催都市シドニーにいた。今の社会状況とは全く異なるので比較はできないが、オリンピックに対する熱量と盛り上がり方が凄かった。開催都市だったということもあるのか、街に溢れた活気が今でも鮮明に思い出せるほど凄かった。その時のオリンピック一色に装飾された街の様相なのか、人々の期待感や喜びなのかはわからないが、とにかく別の街かのように街全体が歓喜に溢れていたように思う。

ボランティアに参加していたため、オリンピックに対するより特別な思いがあったからなのかもしれない。ボランティアのユニホームを着ていると、街で“good on you mate!”とオージー独特?の表現で声をかけてくれる人、無言で👍をくれる人、微笑みかけてくれる人が少なくなかった。街の人々がみな友達かのような空気感に溢れていた。

ボランティアではどんなことをするのかも知らないし、それまで経験すらなかったのだが、学友に誘われたのを2つ返事で承諾し応募することになった。第1回目の募集ということもあって、競技会場など選択枠がいくつもあったのだが、どうせなら選手村がいいねということになり第一希望にしたところ、運よく希望が叶い選手村で働くことになった。何気なく応募し、人生で初めてのボランティアなるものを経験したのだが、オリンピックにはいい思い出しかないと言えるほどの忘れられない思い出と、忘れられない景色を見ることになるとは思ってもよらなかった。

ボランティアには専用ユニホームとして、ポロシャツ、パンツ、スウォッチが支給された。選手村のボランティアユニホームは青がモチーフとなっていた。スウォッチを貰えたのは嬉しかったのだが、文字盤がシンプルすぎて？正確な時間が分かりづらい仕様だった……。日本メディアでは、ボランティアの無給の是非が取り沙汰されたことがあったが、シドニー2000では無給ボランティアとそれらを取りまとめるマネージャー的な有給スタッフがいたように思う。ボランティアとは本来無償で提供する奉仕活動だと思っていたので、何が問題だったのかよく解らなかったのだが……。ただボランティアユニホームとIDを身につけていれば、公共機関は無料で乗車できた。選手村のフードコートも無料だったように思う。



選手村へは最寄駅から専用バスによる送迎が行われていたのだが、嚴重にセキュリティー管理がなされていた。まず、選手村に入るための専用ゲートに行くまでに停車し、バスに不審物がないかチェックが行われる、起爆物などないかバスの底まで大きなミラーのようものを差し込んでチェックする。当然ながら出入りは徹底的にIDで管理されて、少しでもおかしいことがあると、村全体がロックダウンされ、誰も入るところか出ることもできなくなり、いつ解除されるのかも解らない。幸いにも勤務中に大きな事件は少なく、ロックダウンが何度か起こったが、知らない間に始まり終わっていることが多かったので助かった。

一番印象的だったロックダウンは、余りにも早すぎたためにトーピードという異名をもつ某有名なオーストラリア水泳選手に起こったある事件にまつわる。オーストラリアは水泳に力を入れていて、当時の水泳チームには世界クラスの選手が多数在籍し、国民も水泳競技でのメダルラッシュの期待は大きかった。この選手は特にレジェンド級で、世界記録や金メダルを獲得し、オリンピック前から大きな期待が寄せられていた誰もが知る国民的な選手だった。この選手が競技を終え選手村に帰ってきた時に、セキュリティーチェックであるまじきことが起こった。彼はすでにゲートを通過しており入村していることになっていて、選手村に偽物が現れたのである。偽物がいること自体も問題なのだが、誰かがIDを偽装し、嚴重に管理されているはずのセキュリティーチェックをすり抜けて選手村への侵入に成功したことになる。これは、世界のトップアスリートとスタッフにどのような危険が及ぶか解らないセキュリティー的な大問題でオリンピック委員会だけでなく開催国としての信用に関わる大失態である。本来この手の情報はもれ聞こえてくるような情報ではないはずなので真相は定かではないが、瞬く間にボランティアにまで囁き聞こえていたので、本当だったのなら大騒ぎだったのだろう。このロックダウンは勤務終了後も続いて、いつ帰宅できるか解らない状況に陥ったのだが、幸いにも大事件に至らず、1-2時間程度でロックダウンが解除されたので助かった。今思えばこれが最初に経験したロックダウンだったのだが、まさか数十年後の今、また同じ言葉を聞くとはい思ってもよらなかった。

オリンピック中のシドニーは違った街のようだったが、選手村は異世界だった。選手村は文字通り、巡回バスが通りフードコートではさまざまな国の料理が提供されるほどの1つの大きな村なのだが、100以上の国々のアスリートやスタッフが居住し、本来画面の向こう側にいるトップアスリートたちが普通にうろうろとしているのである。今思えば、世界のあらゆる人種・言語・文化が1か月ほどの間その場所に凝縮されて詰まった小さな世界がそこにあった。シドニーは multiculturalism と言われるほど、比較的さまざまな文化圏の人々が生活しているのだが、大半はアングロサクソン系、アジア・東南アジア系、地中海系の数個からしか形成されていない。

やはり印象的だったのはやはりオリンピック選手だ。選手はほとんどナショナルユニホームを着ているので、同じ国の選手だとはわかるのだが、国が多すぎてどこの国の選手なのかさっぱりわからない。競技を前にしたオリンピック選手は、緊迫していて近寄り難いのかと思っていたが、意外と和やかな雰囲気です声をかけたり握手を求めたりすると、気軽に答えてくれた。競技が終わって解放されたのか参加することだけが目的だったのか、意外とそこかしこで騒いでいる選手も少なくなかった。資金が潤沢な選手やチームは、選手村ではなくホテルに滞在するようなこともあるようだが、テニスのグランドスラムを数回優勝している有名テニスプレイヤーなど意外と見たことのある有名アスリートにすれ違った。NBAで活躍し、その中でも長身とされた有名アジア選手に遭遇した時には驚いた。見上げるほどという表現があるが、何せ目線がその選手のお腹に相当する高さで、たしか2m20cmを優に超えるほどの長身だそうなので、見上げても大きかった。

当時はそれほどオリンピックに対する思い入れも関心もなかったが、やはり日本の選手団のユニホームを見ると感慨深いものがあり、「こんにちは」、「こんばんわ」と日本語で挨拶を交わした。現地では日本選手団を紹介した報道番組など見るができなかったので、国民的に有名な某柔道家ちゃん以外はどのような選手がいるのか知らなかった。柔道家やマラソン選手は体幹、体格、体型が独特なので、一目でその選手だと予想はつくのだが、メダルを取るまで街ですれ違ってあまりだれだか分らなかった。この某有名柔道家ちゃんに出会った時は嬉しさを隠せなかった。フードコートで勤務中、すぐ近くのテーブルに座ったので、思わず握手を求めに行くと嫌な顔もせず応じてくれた。そして驚いた。柔道家は激しいトレーニングで耳が潰れたり、鎧のような筋肉をつけたりと、さぞかし固いガッチリとした分厚い手を想像するのだが、驚くほどふわふわな手をしていて。他の柔道家と握手をしたことがないので比べようがないが、今まで交わしてきた人々との握手と比べても、ダントツにふわふわだ。

フードコートで空いている席の方に選手を誘導するような仕事や、各国選手団の会議のために会場のセットアップをするために村のいろいろな場所を転々としていたので、いろいろな選手に頻繁に出会ったが、当時はスマホのカメラどころか携帯電話やデジカメすらなかったもので悔やまれる。

尽きない思い出の中でも、一生忘れられない景色の1つとなったのは、・・・

長くなったので今回はこの辺で・・・

オーストラリアでは 2032 年アデレードでオリンピックが再度開催されるので、旅行がてら現地で観戦したいものだ。それまでに世界が落ち着きをとりもどしていますように・・・

(一人) Zzzzz。

つづく・・・？